

●不思議な物語①

『悪魔の恋人』
稲生平太郎



金紅石

ここ十年ほどのあいだに欧米の幻想小説や怪奇小説は随分と翻訳紹介されたけれど、たとえばE・F・ブライラーの『The Checklist of Science Fiction and Supernatural Fiction (一九七八)』や『The Guide to Supernatural Fiction (一九八三)』を繙けば一目瞭然、それらはほんの九牛の一毛にすぎない。もちろん、屑みたいな作品が多いのは判っている。でも、死ぬまでにできるだけ沢山「不思議な物語」を読みたいと念じている僕みたいな人間は、夥しい量の物語の山のどこかに素晴らしい宝が隠されているかもしれないと、今日も古本屋に註文の手紙を書き、本棚に手を伸ばす……。

そういうわけで、今回から連載を始めるのは、僕のささやかな「不思議な物語」狩りの報告書——扱うのは主として英米の作品、時々

ウディの際立った特色らしい。プロウディ・イネスはかなり忠実に記録に従っているようにだ。

ちなみに、この物語は作者と親交のあったブラム・ストーカーに捧げられている。

次に紹介したいのは、マーガニタ・ラスキ Marghanita Laski (一九一五—) の『ヴィクトリア朝の寝椅子 The Victorian Chaise-longue』(一九五三)。著者はハロルド・ラスキの姪にあたる作家で、彼女の小説は一冊翻訳されているというものの『失われた少年』(雄鶏社、昭30)、日本ではほとんど無名の存在と聞いていいだろう。

さて、物語自体は非常に単純といえれば単純で、病に苦しむ若い女メラニーが、骨董屋から手に入れたヴィクトリア朝の寝椅子に寝て目を覚ますと、時は九十年近く遡って一八六四年、ミリーという女になって床に臥せていた——というもの。しかし、こうして筋だけ取りだしてみても、この作品の素晴らしさを伝えることはできない。物語のなかで経過する時間は七、八時間、舞台は寝室から一歩も外へ動くことがなく、ミリーの肉体に転移したメラニーの意識の流れを描くことを作者の意図するところなのだ。しかも、ミリー

代としては十八世紀後半から現代まで。日本ではほとんど知られておらず、紹介の可能性も薄い作品を中心にしたと思う。

皮切りとして、J・W・プロウディ・イネス J・W. Brodie-Innes (一八四八—?) の『悪魔の恋人 The Devil's Mistress』(一九一五)はどうだろう。スコットランドの法律家プロウディ・イネスの名前を知っているのは、熱心な幻想文学の読者のなかでも少ないんじゃないかな。オカルティズムに関心を寄せている人ならば、彼を「黄金の暁」エディンバラ支部の中心人物のひとつとして記憶しているかもしれないけれど。ともかく、彼の遺した小説のほとんどは忘却の淵に沈んでしまった。僕の経験からするとオカルティストの書く小説はたいいつまらないので、大して期待もせずに頁を開いたのだけれど、これは予想に反しておもしろかった。オカルト小説ではなくて、超自然的要素の濃い歴史ロマンスといったところ。

舞台は cromwell の時代のスコットランド。ジェイムズ・ホッグの傑作『悪の誘惑』はこれより半世紀ほど後のスコットランドに舞台を設定しているが、どちらも宗教的狂信の支配していた時代ということ共通して

の意識がときどき不意にメラニーの意識に混じりこんでくる。したがって、複雑精妙な文体が要求されるわけだけれども、エリザベス・ボウエンを思わせる女性作家ならではの肌理の細かい文体を駆使することによって、ラスキは見事な成功を収めている。ヴィクトリア朝ロンドンの陰鬱な空気が病室に吹きこんでくるのさえ、僕たちは肌で感じることができるのだ。

隔たった時間に存在する肉体に意識が転移したことから生じる、時間と意識の問題やタイム・パラドックスをめぐる考察も、『ヴィクトリア朝の寝椅子』の読みどころのひとつだろう。タイム・パラドックスを扱うといえればSFの独壇場みたいにも思われているけれど、この作品やチャールズ・ウィリアムズの『Many Dimensions (一九三二)』など幻想小説にもその秀れた例がある。

擬った文体ゆえに決して読みやすくはない物語だが、佳作の名に恥じないものだと思う。今回の最後はぐっと新しいところで、ウィリアム・ヨーツバーグ William Hjortsberg (一九四一—)——この名前の読みかたにはあまり自信がないので、まちがっていたらごめんなさい——『墮ちていく天使 Falling

る。物語は、悪魔に魅入られてその恋人、さらには魔女の女王となった女イザベル・ガワディ Isabel Gowdie、悪魔に魂を売って秘められた智識を得た領主、それに悪魔の三者をめぐって展開する。巧みな人物描写、適度なユーモア、生き生きした文体——スコットランドの歴史とフォークロアが巧みにちりばめられたこの物語は一読に価するだろう。

ところで、この作品、実話に基づくという設定になっていて、作者自身の先祖も登場するのだけれど、てっきり小説上の技巧かと思っていたところ、実は魔女イザベル・ガワディは実在していたのである。

手元にあるウィッチクラフト関係の研究書をあたってみると、そのいくつかが彼女の名を挙げており、ウィッチクラフトの世界では有名な人物らしい。なかでも最も詳しく論じていたのが、スコットランドの魔女であるセーカ、ウォルター・スコットの『Letters on Demonology and Witchcraft (一八三〇)』。スコットによると、焚殺される前に遺した告白が異常なまでに具体的に詳細であること、また、そのなかで悪魔のみならず妖精の存在についても語っていること(これは『悪魔の恋人』において活かされている)などが、魔女ガ

Angel』(一九七八)。ヨーツバーグは六十年代の終りから作品を発表しはじめたアメリカの作家で、長編の数はそう多くない。

「もしレイモンド・チャンドラーが『エクソシスト』を書いていたらどうなったかを思い描いてみようとする」とはステイヴン・キングの『墮ちていく天使』の一節——そう、この作品はなんとハードボイルド・オカルト小説(一)なのだ。

一九五九年、ニューヨーク、主人公の私立探偵ハリイ・エンジェルがルイ・サイファーなる正体不明の人物の依頼を受けるところから、物語は始まる。戦前に一世を風靡した流行歌手ジョニー・フェイヴァリットの現在の行方をつきとめるといというのが依頼の内容だったが、断片的な手がかりを追跡していくうちに、「エンジェルは意外な事実」にぶつかる……。大都市の片隅で秘かに行なわれる黒い魔法やワドゥ教の儀式など通俗オカルト小説としての趣向はたっぷりだが、五十年代末のニューヨークが丹念に描かれているのも魅力だろう。途中で予想がつくとはいえ最後にどんな返しも用意されていて、娯楽小説としてはなかなかよくできた作品だ。では、また次回……。